

特殊誘導法による側頭部棘波記録

戸田 由香, 三鍋 博史, 江口 和子, 岡田 健, 小出 典男 (岡山大学医学部附属病院)

【目的】側頭部棘波記録においては、頭蓋骨底部に囲まれた内側側頭部に焦点を有する場合、通常の国際電極法に基づく頭皮電極では棘波を把握しきれない場合がある。

また、基準電極を耳朶に置くと、側頭部との電位差が微小なため、棘波を見落とす場合も存在する。そこで、これらの問題点を解決するために考案された、前側頭電極 T1, T2 と平均基準電極法 (Common Average reference: A誘導) を用いた特殊誘導法の有用性を検討した。

【対象および方法】対象はてんかん発射を側頭部に有する 14例 (10歳6ヵ月 -36歳6ヵ月)。脳波検査は国際 10/20法に T1, T2電極を加え、さらに基準電極として A誘導も併用し Neurofax EEG-4524, EEG-1518で行った。デジタル脳波計の記録で、同時刻の脳波に認める棘波を特殊誘導法を含めた種々の誘導で確認し、通常電極と特殊誘導法での棘波の導出の違いを比較した。特殊誘導法で導出が良好であった例を「良」、両者に差がなかった例を「不変」とした。

【結果】(1) T1, T2電極では、棘波の振幅、出現頻度が通常電極よりも勝っている「良」が、14例中 7例みられた。例

では通常電極では棘波が認められず、T1, T2電極によって始めて棘波の導出が可能であった。

(2) A誘導では、耳朶電極で広汎性にみられたり、アーチファクト状で不明瞭であった棘波が、限局性の明瞭な棘波として導出された「良」が 14例中 7例みられた。例では棘波のみならず、耳朶電極で広汎性にみられた Theta律動が一侧の側頭部に限局した。

(3) T1, T2電極、A誘導両者の併用によって、14例中 9例において通常電極のみの場合と比較して、側頭部棘波が明瞭に導出された。

【結語】特殊誘導法は側頭部棘波の導出に有用であり、側頭葉てんかんが疑われる症例では、可能な限り T1, T2電極と A誘導を行うことがのぞましいと思われた。

連絡先 086-235-7677